

日本記者クラブ会報

第 467 号
2009 年
(平成 21 年)
1 月 10 日 発行

〒100-0001
東京都千代田区内幸町二ノ二
日本プレスセンタービル
© 社団法人 日本記者クラブ
<http://www.jjpc.or.jp>

危機こそジャーナリズムの定番

理事長 滝鼻 卓雄

日本記者クラブの会員の皆さま、
明けましておめでとうございます。
2009 年(平成 21 年)が、すべ



公賓として来日した潘基文国連事務総長の会見で司会を担当した滝鼻理事長・右 (08. 7. 1)

ての会員の皆さまにとって、実りある一年になることを心より祈っています。それとともに、皆さまのクラブへの熱いご協力をお願い申し上げます。

2008 年を顧みますと、日本も世界も百年に一度といわれる津波に襲われました。

アメリカにおけるサブプライムローン問題に伴って、金融派生商品が不良債権化し、米、欧、日などの金融経済を蝕んでいきました。そして 9 月、アメリカ証券大手リーマン・ブラザーズが破綻し、米国発の金融危機が世界に波及しました。その後の動きはご承知の通りです。日本も無縁ではなく、10 月には、東京株はバブル後の最安値を記録

しました。企業の大幅減益と雇用の深刻さは、これからどうなるのか。予測が困難です。

米大統領選でオバマ氏が勝利し、漠然とした変化の兆しを感じるもの、日本では「ねじれ国会」の混迷、短命あるいは短命らしい内閣の誕生によって、政治の行方はますます不透明さを増しています。

経済は危機、政治は混迷、それに加えて新型インフルエンザに象徴される感染症の爆発の不安。私たちはどうすればいいのでしょうか。

こういう時こそ、ジャーナリズムの出番ではないでしょうか。新聞、テレビ、ラジオ、出版、ネット系媒体は、事実を伝えるだけでなく、近未来から中長期的な予測を伝達する使命をおびています。

その発信源になることが、日本記者クラブの運命的な役割です。昨年「クラブ会報」正月号の中で、私は次のようなことを呼びかけました。

「クラブは国の内外に目と耳を凝

らし、変化の兆しを最も早くキャッチできる場を提供するつもりです。それがクラブの存在意義だからです」

「ニュースの不夜城であるクラブはあかりを灯し続けます」
しかし、今日の危機を予測するには、さらなる努力が必要でした。もちろん有能なジャーナリストを結集している企画委員会の活動は高く評価します。タイミングのいい会見もしばしば実現しました。もっと欲張りと言わせていただければ、曜日を問わず、時間に関係なく、クラブから日本、世界に向けてニュースを発信できればと希望します。

重要なニュース・メーカーは自らクラブに飛び込み、発言するとは限りません。どちらかと言えば、隠れたがるものです。会見の場に引っ張り上げる交渉術も必要になります。

またニュース・メーカーだけではなく、ニュースの裏側を鋭く観察できる人物にもっと登場して欲しいと望みます。近未来を予測するには、アナリスト、研究者の方々の分析や発言が重要だからです。

「危機」におけるナショナル・プレスクラブの使命をこれ以上言うつもりはありません。すべての会員はプロだからです。

(読売新聞東京本社代表取締役会長)

新春随想

一つの点、一本の線が

生命を持てば

訪人

などの真のフォルムや本性がなんとか理解できるようになった。

パネルに映し出される北斎の言葉はフランス語だ（私が逐語訳してみました）。北斎が現代の美術用語を使って自分の仕事を語っている。私は読みながら、葛飾北斎という江戸時代後期の浮世絵師というより、現代の芸術家の言葉を読んでいるような気がした。

この人は思い切りがいい。「七十歳までの仕事はすべて不満足」なんて、なかなか言えないせりふである。それまでも評判になった作品は数々ある。それをきれいさっぱり否定したのだから、天晴れというほかはない。

七十歳までの自分を一切捨てて出直した。そのかいあって、七十三歳で自分にめぐりあった。北斎はそう言いたかったようだ。

——こうして、八十六歳になって、私は著しく進歩を遂げたようである。九十歳で事物の核心に迫り、百歳で必ずやより高い、定義できない状態に達し、百十歳で一つの点、一本の線はもとより、すべてのものが生

昨年夏、久しぶりにパリに行った。

私にとつてパリのたのしみはまず美術館と書店、それも小さい美術館と古本屋をまわることである。こんども用事の前後に多少の時間ができると、このひそかなたのしみを味わうためにいそいそと出かけた。

こぢんまりした美術館のいいのは、多くの場合、一人の芸術家か一つの主題でつくられていることだ。大型美術館のように大勢の芸術家の強烈な個性と個性が正面衝突して、はらはらすることはない。

大型美術館でも、お目当ての一人の画家の作品だけ観て、あとはいさぎよく目をつぶってさっさと出てしまえば別だが、なまじ禁欲的行動をすると、ストレスがたまつてかえつ

て疲れる。

その点、小さい美術館は会場も広くないし、観客も多くないから、気がねなく芸術家の世界にひたることができる。私のお気に入りは東洋美術専門の国立ギメ美術館である。

入り口でクメールの微笑をたたえた女神が迎えてくれる。いたずら娘のようなアップサラも首をかしげて手招きしてくれる。

こんどもギメ美術館に行こうとメトロを出ると、長蛇の列ができていた。美術館の正面に「Hokusai」と大書したのぼりが下がっている。二カ月前に「北斎展」がはじまったと聞いたが、まだ続いているとみえる。

三十分ほど待つて入り口にたどり

ついた。クメールの微笑はあとまわ

しにして、まず「北斎展」をのぞくことにした。北斎はこれまで東京で随分見たから、一瞥するだけでいいと軽く考えて地下の特別展に入った。ほの暗い室内のパネルいっぱい、北斎の言葉が投影されている。目を通して驚いた。

——私は六歳のとき、さまざまなおブジェのフォルムを描く癖があった。

五十歳ごろ、おびただし数のデッサンを描いて発表した。しかし、七十歳以前の私の描いたものは、なにもかもすべて自分にとって不満足だった。

七十三歳になって、鳥や魚、植物

命を持つようになるだろう。

これは北斎の『富嶽百景』前編「あとがき」である。『富嶽三十六景』も『富嶽百景』も観た覚えがあるが、あとがきがあるとは恥ずかしながら知らなかった。

七十歳までの仕事は一人前ではない。つまり北斎は七十歳までは前期成人だと考えていた。七十三歳でやっと一人前になる。それを七十五歳で後期高齢者なんて、ちゃんちゃらおかしいと噴き出したことだろう。

北斎は八十歳を過ぎても、第一線に立ち、富士山を仰ぎ、描き続けた。天の高みをめざしてよじ登ろうとする執念と気迫。それがあから九十九



諏訪正人(すわ・まさひと) 1930年生まれ 東京都出身 東京大学仏文科卒 53年毎日新聞社入社 地方部 政治部 外信部 フノンペン ジュネーブ特派員 パリ支局長 東京本社学芸部長 論説委員 79年から02年まで朝刊一面コラム「余録」を担当 現在毎日新聞特別顧問

歳で核心に迫ることが可能になったのだと思う。

「私は著しく進歩を遂げたようである」とひとごとのように言っているが、これはこの作家一流の照れ隠しで、堂々とした勝利宣言ではないか。いや、お見事。つくづく感服しました。北斎と呼び捨てにしては失礼にあたる。これからは北斎さんと呼ぼうと心に決めた。

北斎さんは一七六〇年、江戸本所に生まれた。『富嶽百景』前編が刊行されたのは一八三四年だから、北斎さんの言葉は数え年で七十五歳のときに書かれたことになる。七十五歳の芸術家が九十歳、百歳、百十歳の自分を見据えて書き残した稀有な文章である。

北斎さんにとって、年齢が大事なものではない。重要なのはその年齢になつて何ができるかが、実現するために何をどうするかという段取り、仕事の目標である。北斎さんの芸術的、人生的マニフェストといつてもいい。

私は展示された作品を観終えて、パネルの言葉をメモしようとして引き返すと、年配のフランス人男性が手帳

に言葉を写している。

先に写し終えた紳士は「これを読むと元気が出るね」と私に言つて手帳をポケットにしまった。私もメモしながら「本当にそうですね」とうなずいた。

北斎さんの心意気は私にもひしひしと伝わる。そうだ、年齢の数字にこだわるのはやめて、天の高みを仰ぎみて足元で仕事をしよう。いまできないことも、九十歳を目ざして努力すれば、もしかするとほんのちよつとだけでも可能になるかもしれない。

あのフランス人ではないが、北斎さんに励まされて、私も豪気な気分になつたのだから不思議だ。北斎さんの元気は伝染する。

東京に帰つて『富嶽百景』を探し出した。前編跋文に例の言葉が載っている。「一つの点、一本の線」のくだりは、原文で「百有十歳にしては一点一格にして生るがごとくならん」となっている。

一点一格生きるがごとくなつた絵、それが北斎さんの理想の絵画とするなら、一点一画生きている文章を綴るのが新聞記者の理想ではないか。不可能ではないとしてもきわめて困難だ。しかし、一点でも一画でも、生気の抜けた、しおれた文章は書くまいという禁忌を守ることが私にもできる。

北斎さんは一生の間に九十三回転居し、号を三十数回変えた。なかには一、二カ月で引つ越したこともあった。度重なる改号と引つ越しの理由は何か。専門家にもわからないらしい。

いつも原稿に行き詰まればかりいる私には、北斎さんの胸中がほんの少しわかるような気がする。北斎さんも仕事があまくいかないときはある。あすになつたらうまくいくさと自分に言い聞かせて、翌朝、目が覚めてもだめ。仕方がない、環境を変えようとさつさと引つ越した。それでも効き目がなければ心機一転、号を変えたのではないか、というのが私の推理である。

北斎さんは一八四九年四月十八日、九十三回目の転居先である浅草聖天町遍照院境内の粗末な長屋で亡くなった。九十歳だった。臨終の床で、北斎さんは友人にこう言つたという。

「天我をして十年の命を長ふせしめば、(しばらく絶句したのち)天我をして五年の命を保たしめば、真正の画工となるを得べし」

●このバスに乗り遅れないで… 大越 健介 (NHKワシントン支局長)

私は選挙の予測が嫌いである。だいたい外れてしまうからだ。

しかし今度の米大統領選挙は違った。エラそうに言わせてもらおうと、オバマの地すべりの勝利は、ずいぶん早い段階から、私にとつては当然のことであった。アラスカのペイリオン登場で、オヤジごころはくすぐられたが、それでもオバマ勝利の確信は動かなかった。

果たしてオバマは圧勝した。世界は新しい指導者の誕生を大いに歓迎した。

ところが日本はやや違っていたように思う。オバマ勝利の反応を伝える官邸番の記者は「政府はオバマ氏の勝利を冷静に受け止めています」とコメント。「冷静」ってどういう意味？「どなたが大統領になっても、長年培ってきた日米関係を維持することが大事」。麻生首相の記者団へのコメントだ。ふーん。

ワシントン

記者のリポートもうなずける。もちろん、政府の公式コメントは、勝利への祝意を述べている。しかし、そっけなく、冷淡。民主

党政権になれば保護主義的傾向に走るといふ懸念か。それとも日本びいきだったブッシュ共和党政権への惜別の思いか。

でも、このバスには乗り遅れない方がいい。2年近い熾烈な選挙戦を制した勝者への賞賛は、国の立場や思想を超えて率直に表明されるべきだ。しかも、オバマ政権下での日米関係はこれから築かれていくのであり、先回りして心配げな顔を見せても滑稽なだけだ。事実、米国務省の高官は言ったものだ。「どうして日本はもつとどつしり構えないのか」。

一緒に新しい世界を見に行こうよと誘われながら、「どうせボクなんか」とバス停にしがみつくと、かわいさかといじけてみせる。「あ、そう」(ダジャレか)の一言で本場に置き去りにされるかも。

もつと腰を軽くしてアメリカのダイナミズムに付き合っても損はない。少し心配なこれからの日米関係。それが2009年の私の取材テーマです。

(おおし・けんすけ 1985年入局 07年から現職)

●金融危機の余波にアンテナを 大木 俊治 (毎日新聞モスクワ支局長)

09年は米国のオバマ新政権発足で米露関係が動き出しそうだ。ブッシュ政権がロシアの反対を押し切って進めようとした東欧への米ミサイル防衛(MD)システム配備、グルジア、ウクライナの北大西洋条約機構(NATO)加盟などの方針を、オバマ新政権が引き継ぐのか、見直すのか。メドベージェフ大統領、プーチン首相のロシア政権は、オバマ氏の柔軟な姿勢が関係改善に道を開くことを期待しているようだ。

だが、期待はずれに終われば、一層反米姿勢を強め、米露間の「新冷戦」が長期化することは避けられない。そのターニングポイントが年内に必ずやってくるだろう。

もう一つの、より深刻な懸案は、昨年の金融危機の余波だ。地方の企業や工場で給与のカットや人員整理が始まり、国民の間で不安はじわじわと広がっている。経済

モスクワ

危機は春にピークに達し、暴動や社会混乱が起きると予測する専門家もいる。そうならば、経済成長に支えられてきたロシア社会の安定は崩壊す

る。政府が強権で混乱を鎮圧するか、政権内部の対立で政治混乱に発展するか、あるいはメドベージェフ大統領が辞任し、繰り上げ大統領選でプーチン氏が大統領に返り咲くのか。

いったん混乱が始まれば收拾がつかないのがロシアの特徴だ。あらゆる可能性を考え、中央政界だけでなく、国民や社会の動きにこれまで以上に注意深くアンテナを張りめぐらせていかないと判断を誤ることになる。

さて取材以上に個人的に最も頭が痛いのは、今年やってくる支局家賃の契約更改だ。家主の外務省外郭団体が大幅値上げを提示してくるのは間違いなく、経費増を嫌う本社との板挟みで骨折りの交渉になることを覚悟しなければならぬ。経済危機で家賃が下がるのなら分かるが、そういう常識が通用しないのがロシアだ。家賃交渉で取材への精力が削がれては笑い事では済まない。とにかく昨年以上に神経を使う年になるのは間違いない。

(おおき・としはる 1985年入社 07年から現職)

● 何といってもサルコジ夫妻

山口 昌子
(産経新聞パリ支局長)

サルコジ大統領とカーラ夫人に今年も振り回されそう。現役大統領の離婚、結婚は初という記録に加え、大統領の3度目の結婚相手は未婚の母のうえ元モデルで現役歌手。昨年は夫人のモデル時代のヌード写真が出回ったほか3枚目のアルバムも発売されるなど私生活での話題に事欠かなかつた。

「私の妻は働いています」とは大統領の自慢のひとつだ。歴代の大統領夫人も社会活動をしてきた。ベルナデット・シラク前大統領夫人は医療機関を主宰し、県会議員の公職にもある。ダニエル・ミッテラン元大統領夫人も人道団体の「財団」を主宰、現在も継続している。

しかし、あくまでも「大統領夫人」という肩書きがあつてこそといえる。カーラ夫人の場合は、結婚前から歴とした職業があつたわけだ。「カーラ・ブルーニ・サルコジ」と旧姓入りで呼ばれるゆえんだ。

パリ

加えて昨年12月にはエイズ・結核・マラリア対策世界基金の「初代大使」の公職に就き、今年は大

統領夫人としての公務も一段と多くなりそう。大使就任時のエリゼ宮(大統領府)での記者会見で生カーラ夫人を初めて拝ませてもらったが、写真や映像よりずっと華奢で優雅だった。

一方、サルコジ氏は今年、就任2年目を迎える。就任1年目の昨年は選挙公約の「過去との決別」と「改革」実施のために、「首相兼任」と野党・社会党に皮肉られたほど内政面でもあれこれ指導力を発揮。一方、大統領の専管事項とされる「外交」では、昨年後半が欧州連合(EU)の議長とあり、金融危機対策やロシアのグルジア侵攻などで文字通り東奔西走。何度、生サルコジを拝ませてもらったことか。

EUと内政にかまけた結果、昨年の主要国首脳会議(北海道洞爺湖サミット)の際に日仏交流百五十年という日本政府案は飛んでしまった。今年度中の訪日は確定しているそうなので、日本国民ともども、生サルコジ夫妻に接する機会が増えそう。(やまぐち・しょうこ 1966年入社 90年から現職)

● 混沌の中から人々の言葉を

市川 速水
(朝日新聞中国総局長)

昨秋から11年ぶりに中国で暮らしている。昔と比べて恐ろしく変わった点と少しも変わらない点を毎日のように発見する。それは、自宅アパートから総局まで、地下鉄を4駅乗るだけでも実感できる。

改札口の横には所持品のセキュリティ検査がある。でもパソコンも録音機もひっかかったことがない。職員がまじめにモニター画面を見ている様子もない。切符の自動販売機が並んでいるが、釣り銭切れで作動していない機械が目立つ。

乗車券は2元なのに機械で1元札が使えない。改札口は突然、出口と入り口が反対になり、時には切符が吸い込まれ出てこない。それぞれを監視する職員が立っているから、自動化されてもいっこうに人が減らない。

北京

一人の女性職員と顔なじみになった。「なぜ改札機はいつも調子が悪いのか」と聞く。「中国製だからじゃない?」日本より技術が遅れているし」とさわやかに笑う。

陰鬱さのない笑顔で日

本を単純にほめる様子は、以前はなかなか経験できなかった。以前は切符を買う窓口で「大きい札しかない」と言っても「釣り、ないよ」と無愛想な一言で終わっていたものだ。

電車に乗り込むと、下着シャツ姿の男性が両肩に麻袋を担いでいる。隣でアルマーニの若者が携帯電話でながら歌って物乞いしている。東京・銀座のような王府井駅の地上に出れば欧米のブランド店が目に入る。中国はどこへ向かうのか。新年に大それた問題の答え探しを誓うつもりはない。ただ、30年間の開放政策や北京五輪を経て、合理・非合理が混在しつつも世界の思考水準や価値観が着実に浸透している。

ようやく自分の言葉で国家を語ることのできる時代を迎えたのではないか。政治スローガンではない、夢や悩み、不満を一人からでも多く聞きたい。中国が日米とどう付き合ひ、北朝鮮有事でどう動くか。気になる問題の答えは庶民の言葉にも潜んでいる気がする。

(いちかわ・はやみ 1983年入社 08年11月から現職)

● 足場の混乱にミャンマーも

田原 徳容
(読売新聞バンコク支局記者)

政情不安が続くタイで日々の取材に追われる中、隣国ミャンマーの軍事政権の動向が気になる。権力維持に向けた「見せかけの民主化」の準備を進める気配がうかがえるが、現地取材もままならず、もどかしさが募る。

一方のタイでは、反政府勢力の空港占拠で混乱が拡大。何がそこまでさせるのか、わからない。東南アジアの混沌にどっぷり浸かり込んだまま、出口のない新年を迎えた。

ミャンマーの注目度は明らかに増した。2007年9月の軍政による反政府デモ武力弾圧で日本人ジャーナリストが殺害され、昨年5月のサイクロンでは13万人以上の死者・行方不明者が出た。だが、メディアの入国制限が厳しく、いずれも現場を確かめることができなかつた。人権抑圧が常態化し、貧しい暮らしを強いられる国民の姿が、近くて遠い。

バンコク

少しでも肉薄すべく、現地助手や協力者との連携を深め、軍政発表との差に目を光らせる。タイ国境の不满分子との接触

も重要だが、「軍政憎し」の極端な情報もあり、バランス感覚が必要だ。軍内部からは不協和音も聞こえる。今年は、総選挙に向けた政党結成が本格化し、軟禁下のアウン・サン・スー・チーさんへの対応も注目される。耳をとぎすますしかない。

その取材の足場であるタイが、秩序を失い、混乱を極めている。反政府勢力の空港占拠では、警察も軍も動かず、旅行者30万人が足止めとなり、国家の機能不全を世界にさらした。日本並みに便利なこの国で移動が制限され、荷物が届かないなどの不自由を経験した。背景にあるのは、ビジネスを政治に持ち込んだタクシン元首相と相容れない守旧派との権力争いだが、聞けば聞くほど複雑かつあいまいな対立の構図を咀嚼しきれず、反省する日々だ。

両国とも状況が好転する兆しはない。わかりにくい両国の実情を解きほぐし、報道することが、事態打開にもつながることを期待し、地べたを這って地道に声を拾う取材を続けたい。

(たはらのりまさ 1994年入社
06年から現職)

● 新興国の雄はどっへ行く？

長沢倫一郎
(日本経済新聞ニューデリー駐在記者)

新興国の雄として脚光を浴びるインドはどこに向かうのか。ニューデリー駐在記者として2009年は様々な角度からこの点に注目したい。経済面では世界的な金融危機の影響がどれだけ波及するかが焦点だ。

足元の指標は決して芳しくない。輸出、鉱工業生産はともに08年10月に減少に転じ、これまで景気を支えてきた個人消費も勢いが落ちてきている。産業界で相次ぐ減産や新規投資を凍結する動きは、経営者が景気の先行きに懸念を強めていることを示している。政府は需要刺激策を矢継ぎ早に打ち出しているものの、先進国経済の不振が長引けばインド経済にも火の粉が飛んでくるのは避けられそうにない。

07年度(07年4月―08年3月)まで3年連続で9%台を記録した成長率は、08年度は7%台に低下するだろう。この結果、企業は採用を抑制し、個人所得は伸び悩むはずだ。巨大な国内市場を持ち、中間層が確実に拡大しているインド経済は中長期的には9%を超える成長を回

ニューデリー

る。この結果、企業は採用を抑制し、個人所得は伸び悩むはずだ。巨大な国内市場を持ち、中間層が確実に拡大しているインド経済は中長期的には9%を超える成長を回

復できると予想している。だが目先の減速は痛みを伴い、所得格差など社会のひずみを増幅させる可能性があるだけに、今後の展開から目が離せない。

景気の行方は政治にも影響しそうだ。下院の任期切れに伴う総選挙は09年5月までに実施される。国民会議派を中心とする連立与党が過去5年間の経済発展の実績をバネに政権維持に成功するのか、金融危機への政府の対応を舌鋒鋭く批判する野党インド人民党(BJP)の戦術が有権者の心を掴むのか。次の総選挙は「経済」が最大の争点になると予想する。

経済以外にも注目すべき点はたくさんある。昨年11月に西部の商都ムンバイを襲った同時テロはインドが抱える「治安リスク」を浮き彫りにした。治安悪化に歯止めが掛からなければ海外からの対印投資に水を差すことになりかねない。隣国パキスタンとの関係にも常に注意を払う必要がある。09年は一瞬も気を抜けない年になりそうだ。

(ながさわ・りんいちろう 1988年入社 08年3月から現職)

私が出会った 花柳章太郎

楽屋で女優・轟夕起子と談笑する花柳章太郎
(左、1955年3月、新橋演舞場) 読売新聞社提供

リレーエッセー②



その人に、会ったことはなかった。その人が、目の前に横たわっていた。黒紋付が、夜具の上から逆さに掛けられていた。

一九六五(昭和四十)年正月。東京は底冷えして、五日の夜半から雪が舞い始め、明けて六日は銀世界。計報は夕刊の締め切り間際に飛び込んだ。東大病院小石川分院へ走った。

「花柳章太郎さん急死」と社会面に四段の見出しながら、記事は要点だけ三十二行。

どうにも納得がゆかない。学生の頃からかじっていた新派の芝居。むろん先代の水谷八重子や大矢次郎らがいた時代の新橋演舞場で、闇が迫れば築地川に提灯の光が赤くにじんだ。

そんな記憶をたどりながら、デスクに電話した。「名優の死をあれっぽちで終わりにして、いいんでしようかね」と、おずおず切り出した。なにしろ三十歳にもならない走り使いの遊軍だ。「朝刊に書きやあいいじゃねえか。その代わり百行までだぞ」と念を押された。

原宿の家に飛び込んだ。上がり込むと、京塚昌子がお勝手にいた。新

もう新派の女形芸もおしまいだよ

西島 雄造

派の役者は、みんな演舞場の初芝居に出払っていた。京塚はテレビで人氣が出て、座敷に上がれない不義理があった。でっぴりしたからだを縮こめるようにして、水仕事をしながら、ぐすんぐすんと洩(はな)をすすっていた。

遺体に寄り添うように男が一人、ぼつねんと座っていた。川口松太郎だった。「そこに座りな」と手招きしてくれた。役者の白い顔が見えた。

眠っている、そのままだった。「明治一代女」や「鶴八鶴次郎」と、川口が第一回直木賞の物語に、舞台で息を吹き込んだ日本橋育ちの役者。

「女形芸も新派も、これでおしまいだ」と、こっちは浅草生まれ。そう言っただけで目をしばたき、「三日だけつとめた『大つごもり』のおみねを英つや子に渡したもので、つや子の着物は、髪はと、うわ言のように……。うまいこと早い記事を書いてくれよ」と、頭をこっくりさせられた。

縁側の戸障子が開け放たれていた。あたり一面、積もった雪で覆われ、沈みかけた陽が冬ざれの東京を照らし、朱を流したように正月の風景を染めていた。一部始終が、新派の舞台のようだった。



にしじま・ゆうぞう 会員(元読売新聞 聞芸能部長)

宇治さんの木版画「萬葉集」展



1月19日(月)~30日(金)
12時~18時30分(日曜休廊・最終日16時まで)
ギャルリ・ブス 中央区銀座3-14-16
銀座アビタシオン201
Tel 5565-3870

副理事長の宇治敏彦さん(中日相談役)の年賀状は、毎年、見事な版画です。早大在学中から取り組みはじめ、棟方志功さんから「展覧会に出しなさい」と勧められたほどの腕前です。この20年間は萬葉集の歌をテーマに作品をつくっており、今回、新作を中心に個展を開きます。

会議報告

第376回会員資格委員会(書面)

1月1日付の会員入退会を書面で審査した。

第382回企画委員会

(12・16 宴会場)

「2009年予想アンケート」10問を決定した後、司会を担当した委員が行事報告をした。

出席 船橋委員長、宮田(謙)、倉重、脇、長谷部、高畑、宮田(一)、菅沼、田崎、影山、飯野、川戸、井田、川村、石郷岡、高橋、長沢の各委員。

むとろ
武藤としろう
敏郎

大和総研理事長



▼日米の危機対応に苦言

財務事務次官時代は「存在感たっぷりの黒子」。決して主役を食うこととはしないが、いやがうえにもその輪郭が目立ってしまう。小泉政権時代、あの政策も、その仕掛けも「武藤さんが汗をかいたらしい」と言われたものだ。それでも、自ら汗の経緯を語ることはほとんどなかった。

日銀総裁人事の騒動を経てシンクタンクにフィールドを得た後は、「黒子」と180度違う「発信者」に。この日の講演も最初は抑制を利かせていたが、途中から新しい顔が端々にのぞいた。

「原則なき対症療法という感じがぬぐえない。財務長官とFEDの連携がどうなっているのか」「不良資産の買い取りと公的資金注入はワン

12・1(月)研究会「金融危機」②
司会 長谷部剛委員 出席 13人

セットだと思っていた。ポールソン(米財務長官)のやり方は中途半端。揺れ動く米政府の危機対応に苦言を呈した後、その矛先は日本の経済対策にも及んだ。

「足元の痛み止めは政治的には必要だが、これから日本がどういう役割を演じるのか、そういう分野に集中投資しなければならぬ」。金融危機の後に来るのは単なる不況ではない。経済秩序のパラダイム転換なのだ、という思いがあるのだろう。

霞が関、永田町の調整作業から開放されたからなのか、財務次官、日銀副総裁時代に比べ表情も幾分柔和になった。複雑な先端金融商品を理解する有能な監督者が行政にいるのか、という問いには「そういう人を雇うには(国家公務員の)給与体系が合わない」と言って笑わせた。「(当局が)複雑さにつき合い過ぎた面もある。(投資家も)今はFLIGHT T O S I M P L I C I T Y (単純志向)だ」との指摘は、政局に翻弄された果ての自身の心境を映しているようにも聞こえた。

共同通信経済部長 河原 仁志

まえだ
ひろたけ
前田 弘毅 大阪大学世界
言語研究センター特任助教

▼愛憎から憎しみ一辺倒へ

「常に呑み込まれない辺境」「(国際社会が)注目して見捨ててきた地域」。ロシア・イラン・トルコの地域大国には生まれ、しぶとく生き抜いてきた南カフカス3カ国をこう表現した。日本人になじみが薄く、脚光を浴びる機会が少ない地域だが「特徴をつかんだ、うまい表現だな」と感心した。

08年8月8日の北京五輪開会式に合わせたように始まったロシア・ゲルジア「戦争」は、どちらが先に手を出したかもはっきりしないなど、まだ不明な点が多い。だが、ポスト・ポスト冷戦の始まりを告げる世界的な転換点ともみられていて、さらなる調査・研究が待たれている。テーマである「バラ革命」5周年を機にグルジ



12・2(火)研究会「ユーラシア②グルジア紛争」
司会 宮田謙一委員 出席 51人

アに1週間滞在、帰国したばかりの氏は、その時の見聞を交えながら、まずグルジアの政治から文化までパワーポイントを使って詳しく説明した。後半では、「米国とロシアの代理戦争」という見方では捉えきれない民族の特殊性や大国との長い確執の歴史を分かりやすく解き明かした。

中でも強く印象に残ったのは、グルジアとロシアの関係が「愛憎」から「憎しみ一辺倒」に変わったという指摘だ。グルジアワインを好み、最大の輸入国だったロシアが、今も輸入を禁止せざるを得ないのは、お互いに不幸としか言いようがない。

その一方の原因を作ったサーカシドリ大統領を「ポスト・ソ連の申し子」と表現し、民族への愛情が強すぎてロシアとの戦争に突き進んだと解説した。

さらに、今回の紛争では欧米とロシアの陣取り合戦が大義なき戦争をもたらしたと分析、紛争防止の国際的メカニズムを作る必要があると結論付けた。若い研究者の熱意が伝わってきた研究会だった。

毎日新聞出身 飯島 一孝

あいだ ひろつぐ
会田 弘継 共同通信社
編集委員室次長

12・3(水) 著者と語る「追跡・アメリカの思想家たち」司会 中井良則委員 出席 57人

▼米国の思索の営みを解きほぐす

「アメリカは若い国だから思想なんてない」という俗説を信じてアメリカ取材を始めると、手痛いしっぺ返しを食うことになる。「保守主義」「ネオコン」、「リベラリズム」、毎日の原稿で使うこうした言葉一つ一つの背景には、知の巨人が考え抜いた思索の重みがぶら下がっていて、いい加減に批判すれば、返す刀で自分の浅薄な思想があざ笑われる。それを、あらためて思い知らされるのが会田さんの近著だ。



登場以来、

アメリカ政治を動かす思想的基盤と なっていく。

会田さんが強い関心を寄せるのは、ネオコンだ。民主主義の拡大を主張して華々しくイラク戦争を主導した彼らは、イラク情勢の泥沼化とともに「戦争好きの共和党カ派集団」というレッテル貼りでケリがつけられ、過去の遺物とされそうになっていくけれども、会田さんが講演でも強調したように、ネオコンの思想はそんなに浅はかなものではない。スターリニズムへの反発から出発したI・クリストルらの初期ネオコンは、「理想主義で崩壊しそうになったアメリカを、現実主義で正していかうとした人たち」で、彼らの主張は「21世紀でも意味を持ち続けるのではないか」と会田さんは考える。

民主党オバマ政権が誕生する。大恐慌以来の経済危機を迎え「保守主義の時代の終わり」「36年周期のアメリカ政治再編」につながるのを見方もある。アメリカ政治にパラダイム・シフトが起きるのかどうか。思想の動きからは目が離せない。

読売新聞調査研究本部管理部長

飯山 雅史

▼経済面で提携強化を

財政収支は10年間も黒字、経済成長が続く、石油は世界有数の埋蔵量を誇る。カナダは経済の優等生だった。しかし、お隣の米国に発した金融・経済危機の影響が国内に及び、さすがに参っている様子。「世界的な金融・経済危機だからこそ日本とカナダは手を携えていくうではありませんか」。インド大使に転出した前任のジョセフ・キヤロンの後を受け、9月に着任したフリード大使は日加提携のメリットを熱っぽく語る。



本企業によるカナダへの投資を促進したい考えのようだ。

母国の外務・国際貿易省で経済畑が長かった大使は経済にとっても明るい。世界不況への対応で質問が出ると「日本は多くの債務を抱えているが、国債のほとんどは国内で吸収している」と、日本に一層の財政出動を期待しているとも受け取れる発言。なかなか手ごわい外交官である。

カナダは対地雷禁止条約の音頭をとったり、最近では大勢の犠牲者を出しながらもアフガニスタンに人を送って平和構築を支援したりと、世界の問題に関与する「大人の国」。

当方から「飢餓、伝染病、環境、水不足、難民などの問題でも日加が提携できるとよいのだが」と質問すると「もちろん、そういう面でも一緒にやりましょう」との答えだが、経済危機に着任した新大使は経済面での日加提携の強化に特に重きを置いている印象だった。

日本経済新聞論説委員長

平田 育夫

ジョナサン・フリード
駐日カナダ大使

12・8(月) 囲む会 司会 高畑昭男委員 通訳 長井鞠子 出席 81人

さいとう あつし
齋藤 惇 東京証券取引所社長

12・10(水)昼食会「金融危機」③
司会 齋藤史郎理事 広瀬和彦委員
出席 98人

▼市場経済を否定するな

金融への規制を緩めてきたレーガン、サッチャー以来の路線を30年ぶりに見直さないといけない。ヘッジファンドや投資銀行が集った原子物理学者たちが、金融機関の幹部や監督



官庁でも分からない、複雑な商品やシステムを編み出してきた。その報酬は目先の業績に連動し、巨額収入を得て「やり逃げ」する。

このように平易な言葉で語る齋藤氏の解説を、「フムフム」と受け止める向きは多いだろう。そもそも、豪勢に遊んでいたキリギリスを、額に汗してきた私たち働きアリが笑う番である。今回の米国発の金融危機に、そう溜飲を下げる人は多いに違いない。最近のマスコミ論調もそうした風潮を反映して、米国型金融資本主義や市場万能経済の崩壊をはやし立てるものが目につく。

ところが、市場の元締めである齋藤氏は、極端へふれがちな流れに悼

を差すことを忘れない。しなければならぬことは「行き過ぎ」を是正すべきであって、人為的に市場を管理すべきではないという。

「ヒトラーもスターリンも毛沢東もみんな失敗しました。人為的に価格を統制してもうまくゆきません。いろいろと欠点はあるが、金融資本主義が崩壊するとは思えません」

金融工学も証券化も、そのものが悪いのではない。要は、その使い方の問題があった、と見る。「まさか、いまからマルクスに戻る人はいないでしょう。市場主義経済を否定すべきではありません」

野村証券で市場と向き合い、産業再生機構では企業再生にかかわってきた。経験に裏打ちされた言葉には説得力がある。格差解消を御旗に市場経済への批判を強める大手メディアもあるが、問われるべきはその定見のなさや浅薄さだろう。

朝日新聞出向社員(アエラ記者)

大鹿 靖明

かん なおと
菅 直人 民主党代表代行

12・15(月)昼食会 司会 渡辺典二郎理事
倉重篤郎委員 出席 108人

▼自民離党予備軍にアピール

まずは、官僚コントロール術。菅氏によると、国会の第一の機能は国民に代わって首相を決めること(首班指名)で、国民主権とは国民が国会を通じて、つまり首相が組織した内閣を通じてその傘下にある行政をコントロールすることである。

いわば立法院の行政府に対する優越。「日本には三権分立はありません」との菅流憲法解釈論を展開、実践論として、首班指名から組閣まで最低3日間置き、官僚からの振り付けを排除して内閣としての基本方針を決める。閣議が事務次官会議の追認機関化していることを是正、事務次官会議の司会を事務(官僚)ではなく政務(政治家)の官房副長官が取り仕切る——など具体案も示した。政局についても答えは明解だった。



自民党内でも異論のある定額給付金を盛り込んだ二次補正を麻生政権が本当に国会で落ちこぼれなく可決できるのか、としたうえで「1、2月に麻生政権が行き詰まることは十分ある」と断言、その際には選挙管理内閣で補正予算など緊急の経済危機対策を講じることになるだろう、との見通しを述べた。

選挙後については、二大政党による政権交代をシステム化することを最優先する、とのこと。選挙後に参院民主の数不足対策でミニ連立はありうる、とはしたものの、一部自民党が期待する自民、民主両党が互いに大きく組み替わる大再編については消極的な見立てだった。

多分最も言いたかったのは次の一言だろう。「選挙前に(自民党から)野党としての選挙を覚悟で飛び出す人がいれば対応をきちんと考えなければならぬ」。

自民党の離党予備軍がこのメッセージをどう受け止めるか。年末段階では、渡辺喜美元行革相たった一人の造反のみ。会報が出る頃には一体何が見えてくるのか。

毎日新聞編集局次長 倉重 篤郎

ドナルド・キーン氏

12・17(水) 昼食会 司会 宇治敏彦
副理事長 井田由美委員 出席 106人

▼ユーモアたっぷり日本文化論

源氏物語千年紀の年に文化勲章を受章したドナルド・キーン氏。祝賀会を兼ねた昼食会でのスピーチは日本との出会いの思ひ話から始まった。



コロンビア大学で日本文学を研究していた縁で米海軍情報将校として応召され、1945年8月15日、グアム島で玉音放送を聞く。よく聞き取れなかったが、取り調べを担当した3人の日本兵捕虜が泣き出したので内容を知った。同年12月、横須賀に上陸、初めて日本を見たが、まず訪れたのは日光。それは「日光を見ずして結構と言う勿れ」という日本の言い伝えに従ったからとのこと。ことほど左様にキーンさんの日本文化論はユーモアあふれるエピソードに満ちた2時間だった。

京大留学時代は京都郊外の国宝級日本邸宅での下宿生活。隣はアメリカ帰りの助教授ということだったの

でお互いに敬して遠ざけていたが、その人が国際政治論の永井道雄氏。

永井氏に中央公論社長の嶋中鵬二氏を紹介されてから、永井荷風、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫と

錚々たる作家の知己を得ていった。(三島由紀夫はキーン氏に、金メダルで1位をもらえるスポーツの世界がうらやましい)と述べ、ノーベル賞への執念を打ち明けていたという。

日本に関心を持ったのはコロンビア大学で「日本学」を講じていた亡き角田柳作教授の影響だったが、古典文学にのめり込んだのは、ニューヨークの本屋で売れ残りの『源氏物語』(上下二巻、A・ウェーリー訳)を49セントで買ったのがきっかけ。その源氏物語以来日本語も大きく変わってきたが、日本語の危機について尋ねるとキーンさんは「言語は変わるもの。しかし、日本語と日本文化が減じる恐れはありません」ときっぱり言い切った。

時事通信出身

藤原 作弥

菊池 修氏 写真家

12・19(金) 研究会「HIV/エイズ」
司会 宮田一雄委員 出席 27人

▼レンズを通して見た「怪物」

戦場や紛争地域の写真を撮り続けていた菊池さんが「日本のエイズ」に目を向けるようになったのは、2001年にイギリスの通信社から仕事の依頼を受けたのがきっかけだった。エイズの原因となるHIV(ヒト免疫ウイルス)に感染して、様々な日常生活を生きる人たちの姿を伝える国際的な写真展を開催するために「3カ月で日本のHIV陽性者を撮影してほしい」といわれた。



菊池さんは病院やHIV陽性者を支援する非営利組織(NPO)などを訪れた。案の定どこでも冷やかな対応を受け、「取材のためにHIV陽性

者を紹介することはできません」と断られてしまう。

途方に暮れ、たまたま知人から紹介されたゲイ雑誌の編集者の長谷川博史さんに相談したところ、「僕なら撮影していいよ」と言われた。「いや、私が撮りたいのはあなたでなく、HIV陽性者なんです」「だから僕でいいじゃない」

それから7年間、長谷川さんを中心に撮影した7000枚の写真の中から、80枚を選びすぐつてまとめた写真集が「Monster」だという。ひげ面に厚化粧をし、女装で詩を読む長谷川さんは確かに怪物的ではある。

だが、菊池さんによると「モンスターは長谷川さんではなく、僕なんです」という。もつといえ、差別や偏見が根強く残る社会ということにもなるだろう。

タイトルやテーマの性格上、社会的なメッセージ性の強い写真集と思われがちだが、会見では記者側から、映像の芸術的な質の高さを評価する発言も出ていたのが印象に残った。

産経新聞編集委員

宮田 一雄

政策討論会 (3) 税制改革



▼国民の覚悟と政治家の信念

経済危機に対処するには、すべての常識を疑ってかからなければならぬ。金融政策も「何でもあり」なのだから税制にもサプライズがあってもいい。そんな勝手なことを考えながら両氏の直接対決を興味深く聞いた。

「政府税調は与党税調に引っ張ら

●税制のあり方めぐり直接対決

れている。これはよくない」

藤井氏はまず、税を決める仕組みにひずみがあると批判した。

政府税調が十分に機能していない状況を、まま目にする。来年度の税制改正論議にしてもそうだった。政府税調の会合では経済危機のただ中にいるという危機感を感じられず、答申にいたっては主要税目について触れていない。これでは与党税調に気がつかって議論自体を自主規制したと

かんぐられても仕方ない。藤井氏ならずとも政府税調のあり方に疑問を



津島雄二(つしま・ゆうじ) 自民党税制調査会会長



藤井裕久(ふじいひろひさ) 民主党税制調査会会長

いなく国民は多いと思うが、津島氏は持論で応酬した。

「議会制民主主義の原点は税。だから税は立法府で決められるべきだ。断じて政府が決めるものではない。これまで、その良き伝統を守ってきた」

国民の審判を受けた政治家が税に責任を持つという信念を強く訴えた。では、民主党が政権をとったらどういう態勢で臨むのか。

「強力な政府税調をつくる。メンバーは国会議員。議員でない今の政府税調は勉強会程度のものでいい」藤井氏も政治家が税制に責任を持つことにこだわった。

両氏の主張は根底では同じだ。ならば現在の政府税調のあり方を変えることもたやすい。政府税調改革が実現すれば、失札ながら予算の無駄を省くことにもなりはしないか。その「無駄の排除」という点で

両氏が対立したのは消費税をめぐる点だった。

「消費税は基幹税である。長寿社会に対応するのはオールジャパン(全国民が関係する)の消費税しかない。ただ、その前に予算の無駄があるではないか。これをなくすことが先だ」

藤井氏がけん制すると津島氏はこう反論した。

「無駄を排除するまで税率を上げてはいけないというのなら、それまで思考停止しろと言っているようなものだ。これだけの長寿国家だ。無駄を省くまで待っていると云えるような状況ではない」

消費税問題に奇策はありえない。税制の根本を変えるのは国民の覚悟と政治家の信念がマッチしたタイミングしかない。

テレビ朝日報道局ニュース情報センター経済担当部長

名村 晃一

12月18日(木)午後3時~4時45分
第1部基本的な主張(各10分)とディベート(60分・各自の持ち時間20分を延長) 計80分、第2部代表質問(25分) 司会 川村晃司(テレビ朝日)、代表質問 長谷部剛(日経)、長谷川幸洋(中日)の各企画委員 出席 108人

数字で見たこれまでの推移

年度	1969年	1979年	1989年	1999年	2008年
会員数	137社839人	180社1561人	219社2448人	224社2909人	216社2710人
予算規模	3700万円	1億5400円	3億2000万円	4億4200万円	4億4700万円
行事回数	59回	109回	133回	119回	153回
クラブスペース	34→65坪	353坪	353坪	624坪	624坪
人件費・職員	540万 5人	4200万 11人	8700万 12人	1億4200万 12人	1億4600万 13人

*日本以外のG8元首、首相、閣僚の会見

1969～1978	1979～1988	1989～1998	1999～2008
26回	30回	44回	12回

*予算規模は当初予算を丸めた数字。08年度の事業回数は07年度の実績で、職員13人のうち2人は嘱託です。69年度は事務局長、総務部長給与は協会負担だったようです。

ことし11月1日、クラブは40歳の誕生日を迎える。日曜日なので、記念パーティーはその前後の日取りで行うことになるだろう。

137社839人でスタート

日本記者クラブは、1969年10月31日に設立総会（発起人・萬直次新聞協会会長、前田義徳NHK会長、今道潤三民放連会長）を開き、11月1日発足した。大阪万博の前年だった。設立総会までに登録された会員は737人だったが、その年のうちに137社839人になる。会員は新聞協会、民放連の加盟社の編集・報道幹部で、会費はすべて社負担だった。創立披露レセプションは11月13日、東京會館「ローズルーム」で開かれた。

設立への準備に当たったのは、新聞協会事務局であった。69年春頃から協会の編集委員会で、具体的なプランが検討され、7月の編集委員会で設立方針案ができる。7月17日の協会理事会で、これが承認され、「プレスクラブ設立準備委員会」の設置が決定した。この委員会がクラブの規約案などをまとめたわけだが、以下のような方針も確認される。

① 将来、プレスクラブが入るプレビルをつくる方向で検討を続ける

② 過渡的な措置として既設ビルのスペースを占有して、プレスクラブの本拠とする③ とりあえずプレスクラブを発足させ、ホテルなどで国賓クラブの会見を行う。具体的には最初は帝国ホテル4階「松の間」34坪、その後東館2階65坪を本拠にした。

①の方針に従い、日本記者クラブ誕生後、この委員会は「プレス会館設立準備委員会」と名を改め、プレスセンタービル建設に取り組みことになる。そのビルが完成してクラブが現在の9階に移るのが76年8月だ。移転と共に定款を改正し、現行の会員制度になる。それから3年後10周年の時の予算規模、会員数などの膨張ぶりは上記の通り（クラブのスペースは移転時と同じ）。

新制度の下で大飛躍を遂げる

新制度に伴う①新聞、放送各社の会費値上げ、②OB会員、外人記者、賛助会員としての一般企業の加入、③貸し室料などの事業収入増が、予算規模拡大の主要要素だった。①は主に家賃負担（支出の4割強）の増加に対応したものだ。貸し室、宴会、受付（午前9時～午後10時）のための職員増も必要だったが、②と③でこれにも対処できた。

上の表で30周年の99年度のところをご覧いただきたい。スペース拡大は2段階を経て実現した。まず92年に10階ホール（約154坪）を、年間5000万円を支払うことで、クラブ専用にした。98年には10階のレストラン・アラスカに会員専用メニューを置き、シルバー、ゴールドの個室も9階の小会議室並みの料金で会員が使えるようにした。その面積が約117坪。これに伴うクラブの支出増はない。

ジャパンパッシングが影響

しかし、右肩上がりも、このへんまでで、08年度のところを見れば分かるように、会員数は10年で約200人減っている。予算規模は99年度より少し増えているが、主に事業収入増によるもので、近年はこれも頭打ちになっている。

もともと顕著なのは海外からのVIP会見の減少だ。G8の元首、首相、閣僚会見数も、創立から10年単位で示したが、最近10年間は直前の10年の4分の1に近い。

順風は去ったが、人も組織も「不惑」から真価だ。アジアで、これほど「独立と自由」を貫徹するプレスクラブは他にないのだから。

専務理事 岩崎玄道

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■藤波孝生氏をしのぶ会

07年10月に死去した藤波元官房長官をしのび、与野党の国会議員や報道関係者約250人が集まった。官房長官に起用した中曽根元首相をはじめ関係の深かった政治家が思い出・エピソードを語った。元番記者など親交があった報道関係者による追悼集『含羞の人』の刊行を機に行われた。(12. 3 レストラン・アラスカ)

■開高健とボージョレ・ヌーヴォーの会

開高健さんの命日の12月9日には毎年、氏をしのびながらボージョレ・ヌーヴォーを楽しむ会が行われている。生前、開高さんが友人を集めてヌーヴォー解禁を楽しんでいた集まりが、89年に亡くなった後、この会となって続いているもの。パーティーに先立ち、親交が深かった作家のC.W.ニコル氏が講演した。(12. 9 レストラン・アラスカ)

■日本産婦人科医会記者懇談会

産婦人科医会(寺尾俊彦会長 <http://www.jaog.or.jp/>)は月に一度、担当記者との懇談会、勉強会を開催している。12月は医会常務理事の鈴木光明・自治医大教授が「子宮頸がん検診の精度管理向上にむけて」のテーマで講演し、意見交換を行った。(12. 10 宴会場)

■「食糧争奪戦—日本はどうなる—」

未来をひらく日本委員会(尾畑雅美代表 <http://www.nihoninkai.com/>)の主催で、丸紅経済研究所の柴田明夫所長が講演した。(12. 11 10階ホール)

■東京写真記者協会 年次総会・協会表彰式・懇親会

新聞・通信など35社630人が加盟する東京写真記者協会の総会、懇親会が開かれた。懇親会の前に08年の協会賞の表彰式が行われ、常任幹事の君波昭治・共同写真部長から賞状と副賞が贈られた。協会賞の毎日新聞・小出洋平記者「秋葉原ホコ天で凶刃に倒れる男性」は、秋葉原の無差別殺傷事件(6/8)現場をヘリコプターで取材し、被害者がビニールシートの囲いの中で救護を受ける様子を真上から望遠レンズで撮影したもの。(12. 12 宴会場、10階ホール)

■高円宮杯中学校英語弁論大会60周年記念パーティー

高円宮杯全日本中学校英語弁論大会(読売新聞社など主催)の60周年を記念するパーティーが行われた。大会名誉総裁の高円宮妃久子さまがあいさつされた。(12. 13 10階ホール)

■ケーブルマン・オブ・ザ・イヤー表彰式

ケーブルテレビ情報センター(CRI:大島精次代表理事)が、CATVの発展に大きな貢献をした個人・団体を表彰するもの。第21回の今年、蕨ケーブルビジョンの林真吾放送ネットワーク部係長に贈られた。「子ども見守りサービス」の提供で、地域の安全に貢献したことが評価された。(12. 16 10階ホール、レストラン・アラスカ)

■日本衛星中継協力機構(NSNP)懇親会

NSNPは要人外遊などの際に海外からの映像伝送を共同で行うための調整組織で、NHKと民放キー局が加盟している。加盟各社と関係する通信回線業者が集まり、懇親会を行った。(12. 17 宴会場)

■『日経一年生! NEXT』出版記念番組公開収録

学生や駆け出し社会人を対象に経済問題などを解説するネット番組の公開収録。番組の内容をまとめた本の出版を記念して行われた。メイン出演者のタレント・長谷部瞳さんと西川靖志・日経新聞マーケティング本部副本部長が対談した。(12. 19 10階ホール)

新しいOB会員

●囲碁同好会 大軒杯
山城会員が初優勝



恒例の「大軒杯争奪囲碁大会」が、12月20日(土)に開催され、山城孝夫会員(個人D・フジテレビ出身)が初優勝を果たしました。今年の参加は20人。予選を勝ち抜いた3人で決勝トーナメントを行う予定でしたが時間の都合で、先に予選突破を果たした山城さんと栗木欽一さんで決勝戦を行いました。石橋俊彦会員は、時間の都合で3位とさせていただきます。ゴメンナサイ。(河野)

“無心”に訪れた幸運

決勝戦の碁は、前半大きくリードを許して後半に追い込むという形だったが、どうも「アセリ」が先だって「オロオロ」する間に終わってしまった。相手の地所がえらく大きく見える。「ブツブツ」こぼしながら並べ終わるとなんと2目差で勝っていた。

この瞬間の気持ちをどう表現したら良いのだろう。「まあこんな事もあるのですね」と冷静を装うのがやっとなら。計算もできなくなって勝ってしまった。体裁が悪く、帰りの電車でいろいろ考えた。「まあ、アレコレ計算せずに無心でひたすら打っていても時には幸運が舞い込むものだ」と納得させた。暗い話題の多い昨今だが、おかげさまで我が家の食卓は久しぶりに明るく楽しかった。(山城孝夫)

■グテーレス国連難民高等弁務官の記者懇談会

来日したアントニオ・グテーレスUNHCR高等弁務官が、世界の難民情勢や日本のミャンマー難民受け入れ問題などについて記者と懇談した。(12. 19 大会議室)

■21世紀山形県民会議

県内企業・団体の代表や県選出国議員などが集まり、山形の未来を議論する年末恒例の企画。今年のテーマは「少子化の現在(いま)―『子育ての山形』実現へ」。加藤紘一元自民党幹事長も出席した。(12. 20 10階ホール)

■放送人政治懇話会

以下のようにゲストを招いた。藤井裕久・民主党最高顧問(12/3)、田中康夫・新党日本代表(12/10)。

バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

吉カクテル

新年を彩る「金色の夜明け」

グラスの底のグラナディンシロップの赤がオレンジの海に昇る朝焼けを思わせます。リングのブランドー・カルパドスとアプリコット・ブランドーの甘さがひときわ引き立つ1月のカクテルです。(630円)



和食

初春懐石 (1月30日まで)

新年を寿ぐコースを用意しました。下野新聞東京支社(プレスセンター8階)ご推奨の栃木の銘酒「惣誓」をグラスでサービスいたします。(青木尚篤) 突出・アンコウ肝豆腐 前菜・鮑柔らか煮、数の子他 お椀・淡雪仕立て 刺身・三点盛り 焼物・銀鱈露味噌焼き 煮物・柚子窯蒸し 揚物・フグ唐揚げ 食事・水雲雑炊 水菓子・季節の果物 グラス冷酒付き 5250円

洋食

牛タンのシチューコース (2月13日まで)

新年のコースは牛タンのシチューです。赤ワインをたっぷり使ったデミグラスソースでじっくり煮込みました。口の中でとろけるような柔らかさです。ランチタイムにも提供します。(シェフ:黒須修一)

海の幸のスープ サフラン風味 牛タンのシチュー ヌイユ添え サラダ デザート パンとコーヒー (2980円)

寄贈書

共同通信 ニュース予定2009 共同通信社

会員の著書

日本の国家戦略 高畑昭男会員
威風堂々の指導者たち 芳賀綴会員

招待券

加山又造展 日本経済新聞社

08年「報道写真展」日本新聞博物館

東京写真記者協会に加盟する36社のカメラマンが撮影した作品の中で、「一般ニュース」「企画」「スポーツ」などの部門賞を受賞した写真を展示しています。期間は2月28日(土)まで。

クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン (9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン (10階)	経理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3503-2724	
受付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	ホームページアドレス
3503-2722	http://www.jnpc.or.jp

会報委員会

委員長=住田良能

委員=石田昭彦 上村幸治 國府一郎 竹居照芳
枇杷田裕 見市 元 村澤繁夫 渡辺みどり

連絡=長谷川和子 本庄五月

(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

■「クラブ賞」推薦 1月31日が締め切りです

取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を「日本記者クラブ賞」候補としてご推薦ください。締め切りは1月31日(土)です。

会員および会員社に属する方々が候補有資格者です。推薦者は所定の用紙に候補者名などを記入し、推薦理由と参考資料を添えて提出願います。お問い合わせは事務局(電話03-3503-2752 長谷川)へ。

予想アンケート FAXでも郵送でも投票できます

年初恒例の会員懇親会は16日(金)午後1時から10階ホールで行われます。多数の参加をお待ちしています。

今月号と一緒に「2009年予想アンケート」の投票用紙をお送りしました。会員懇親会に出席できない方は、1月23日(金)までに郵送またはファクス(03-3503-7271)で投票してください。

<法人会員代表変更>

南日本新聞社 新 逆瀬川尚文 代表取締役社長
旧 水溜栄一

<会員現況>法人会員 144社 基本会員 802人

個人会員 1595人 法人・個人賛助会員 68社 174人
特別賛助会員 77人 名誉・功労会員 9人

計 212社 2,657人

HP <http://www.jnpc.or.jp/>

「会見速記録」:12月の新規掲載

- 山田孝男 毎日新聞政治部専門編集委員「政治コラムニストの仕事-風知草の場合」(2008. 11. 19)
- 宮家邦彦 AOI外交政策研究所代表・立命館大学客員教授「『オバマのアメリカ』とのつきあい方」(2008. 11. 17)

今後の行事予定 (12/25現在)

1. 16 (金) 13:00~14:30 (10階ホール)

新年互礼会員懇親会

研究会「2009年経済見通し」

①1. 19 (月) 14:00~15:30 (10階ホール)

池尾和人 慶応大学教授

②1. 22 (木) 14:30~16:00 (9階宴会場)

リチャード・ター 野村総研チーフエコノミスト

③1. 26 (月) 15:00~16:30 (10階ホール)

水野和夫 三菱UFJ証券チーフエコノミスト

④1. 27 (火) 14:00~15:30 (10階ホール)

竹森俊平 慶応大学教授

⑤2. 9 (月) 15:00~16:30 (10階ホール)

門間一夫 日銀調査統計局長

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテープでお知らせしています。

写真回廊

撮影 塩山 賢 (しおやま・まさる 日本経済新聞社写真部)



ヒラリー・クリントン上院議員の国務長官起用を発表したオバマ米次期大統領
シカゴ = (08.12.1)

この神妙さと異例さ

現職大統領がこれほどかすみ、次期大統領にこれほど照明が当たる政権移行期は、政治史でも極めて異例ではないだろうか。

無理もない。世界を巻き込んだ未曾有の金融、経済危機は待ったなしの対応が必要だ。米大統領の正式就任は憲法の規定により、選挙翌年の1月20日と決まっているが、オバマ次期大統領は緊急対策を発信し、すでにその座にあるかのように期待を集めている。

史上初の黒人米大統領がアメリカ社会をどう変え、世界の指導国としてその役割をどう演じていくかは静かに今後を見守るしかない。「想定内」も「想定外」も多くあるのが、政治の世界の常である。あまり騒がしい予断は控えたいが、数々の危機は就任後に通常あるご祝儀の「蜜月期間」もない異例さをも生むだろう。

それにしてもこの神妙な二人の表情はどう考えればいいのか。熾烈な予備選を戦ったライバル同士。勝者のオバマ次期大統領が、敗者ながらその政治手腕を頼りに国務長官に起用したヒラリー・クリントン氏。新政権のこの強力な布陣を明らかにした舞台なのに、二人はうつむき加減に目を伏せ、お互いにわだかまりがあるかのような異例の雰囲気だ。これは何を物語るのか、やや気になる。

(清本 修身)